

抄録

※所属は掲載時点での表記

Host range and specific impact of microsporidian *Inodosporus fujiokai* estimated by infection experiments: a risk analysis for freshwater aquaculture

Kazuhiro Sugahara¹, Ryuhei Kinami², Riku Kim², Daiki Takeuchi², Michitaka Yamamoto¹, Tetsuya Yanagida³, Hiroshi Yokoyama⁴, Tohru Mekata⁴ and Sho Shirakashi² (1 Shiga Prefectural Fisheries Experiment Station, 2 Kindai University, 3 Yamaguchi University, 4 Okayama University of Science

Fish Pathology, **60** (2), 69–75, 2025. 6

サケ科魚類に致死的な病原性を示し、体側筋や心臓にシストを形成する微孢子虫 *Inodosporus fujiokai* について、増養殖対象となる淡水魚の感受性を比較した。孢子懸濁液の同時浸漬攻撃試験では、サケ科魚類に高い感受性と致死性が再確認されたが、シスト形成や死亡状況は種ごとに異なり、特にイワナは感受性が高かった。また、ホンモロコとアユでも感染が初確認され、宿主範囲が広い可能性が示唆された。しかし、これら2魚種の感受性はサケ科魚類に比べて低く、感染被害のリスクは低いことが示された。

はじめに：琵琶湖の環境と漁業生産の現状

酒井明久・大塚泰介¹・^敬今井一郎²・児玉真史³ (1 滋賀県立琵琶湖博物館、2 北海道大学名誉教授・滋賀県立琵琶湖博物館、3 水産研究・教育機構水産技術研究所)

月刊海洋, **57**, 253–259, 2025.

2024年9月27日に日本水産学会水産環境保全委員会の企画による研究会「琵琶湖における環境変動と漁業生産の変化：瀬戸内海と比較して考える」が開催された。本稿では、研究会開催の背景となった琵琶湖の環境と漁業生産の現状を概観したうえで、研究会の概要を紹介する。

定点定期観測から見た琵琶湖の水質等の変化

大山明彦

月刊海洋, **57**, 260–266, 2025.

滋賀県水産試験場が毎月中旬に5定点で実施している琵琶湖定点定期観測の結果から、主に1960年代から現在に至るまでの琵琶湖の水質等の変化を概観した。その結果、水温上昇、底層溶存酸素濃度の低下および栄養塩類の枯渇期間の長期化などの水質変化とともに、動植物プランクトンにも特徴的な増減が認められた。

ホンモロコおよびニゴロブナの0歳魚の資源状況について

根本守仁

月刊海洋, **57**, 285–292, 2025.

当场では、ホンモロコやニゴロブナの0歳魚の資源状況をモニタリングしている。両種ともに低成長または肥満度低下という現象が顕在化してきており、その背景には琵琶湖という生息環境そのもの、とりわけ夏から秋にかけての北湖の沿岸環境に課題が生じていることが明らかとなった。

近年のセタシジミの資源変動と親貝の肥満度の関係

孝橋賢一・井戸本純一

月刊海洋, **57**, 293–298, 2025.

かつて5000トン超を誇った琵琶湖のセタシジミの漁獲量は、近年では50トン前後で低迷している。さらに近年では、産卵期の親貝の肥満度が極端に低く再生産がうまく行われない年が度々生じ、資源減少の要因になっている。

琵琶湖における珪藻休眠期細胞等の利用可能性の検証

大山明彦

月刊海洋, **57**, 299–302, 2025.

琵琶湖において、漁獲量の減少や漁獲体型の小型化等に見られるような漁業生産力の低下の改善策として、珪藻の休眠期細胞等に注目した手法を用いることができるかどうかを検討した。